

モリス・マルトノの音楽教育と リラクゼーションの関わり

大矢素子

はじめに

本稿は、電子楽器オンド・マルトノ Ondes Martenot の発明者、モリス・マルトノ Maurice Martenot (1898-1980) が考案した音楽教育法の意義づけを、リラクゼーション・メソッドとの関連から行う試みである。

なぜ、マルトノの音楽教育法とリラクゼーションの関わりに着目するのか。マルトノは1928年に電子楽器オンド・マルトノ（以下オンドと略）を公開したことにより（‘*Théâtre national de l’opéra / Les ondes musicales Maurice Martenot*’, 5 mai 1928）、楽器開発者として主に認知されている。フランスのパリ国立高等音楽院には現在も正式のオンド課程が存在し、国家によって新たな演奏者の育成が継続されている（“Ondes Martenot 1er, 2e et 3e cycles supérieurs” [ウェブサイト]）。一方、マルトノは楽器開発者であるだけでなく、教育者としての側面を有しており、音楽を含めた芸術全般の教育を目指した教育法、マルトノ・メソッド *Méthode Martenot* を考案し、パリ国立高等音楽院においては、オンドの演奏法を教授するだけでなく、舞踏科の生徒に音感教育を施すクラスも担当していた（Laurendeau 1990, 133）。1970年代以降に同音楽院でソルフェージュ教育の大改革を主導したガルテンロブ Odette Gartenlaub (1922-2014) は、音楽教育に大いなる影響を与えた人物として、ダルクローズ Emile Jaques-Dalcroze (1865-1950) らに並びマルトノの名前を挙げている（Gartenlaub 1999, 311）。

しかし、先行研究において、マルトノの音楽教育の概要紹介や部分的言及が行われる一方で、その内実の検証は、これまで十分に行われてきたとは言えない¹。とりわけ、マルトノが自身の音楽教育法において、リラクゼーションの重要性に言及した背景については、ほとんど考察されてこなかった。いったいこのリラクゼーションとはどのようなものなのか。それがなぜマルトノの音楽教育において重要視されていたのか。以下、マルトノの音楽教育の特色を概観しながら考察を進めたい²。

マルトノの音楽教育法の概要

まず、マルトノの音楽教育法の大きな特色の一つは、遊びや身体運動と音楽教育を密接に関連づける点にあるだろう。具体的には、カードやすごろく式の遊びを通して音符に親しむ方法や(図1)、音に合わせて走ったり、音の高低と腕の上限運動を連動させる課題(図2)などが挙げられる。こうして遊びや身体運動と音楽教育を密接に関連づける観点は、ダルクローズのリトミックやオルフ Carl Orff (1895-1982) の音楽教育にも共通して見られる特徴であり、これらのメソッドの有用性を幼児教育や音楽教育の分野で論じた研究は枚挙に暇が無い。

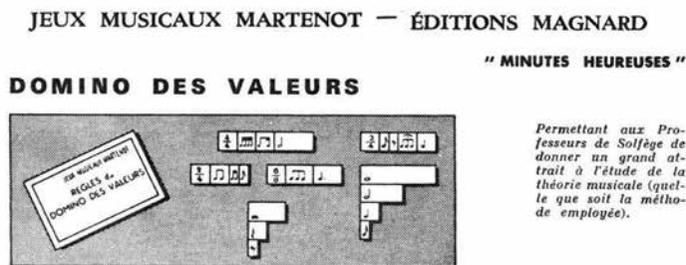


図1 Martenot, 1978, 190.



図2 Martenot, 1989, 19.

また、教材に提示される課題は平易なものばかりであり、内容はリズムやイントネーション、音読みなどの学習要素ごとに分けられている(Martenot 1978, 8)。さらに、進捗はあくまで漸次的に得るべきことが強調され(Martenot 1989, 3)³、教える内容はレベル別に図式化され、使うべきテキストの頁も段階別に示されるなど、進め方が一目でわかるように構成されている(Martenot 1978, 156-157)。こうした教授法の合理化や体系化と共に、多人数授業でも見やすい大きな譜面等の教具も販売し、集団に対しても効果的な音感教育を進めることが可能であると主張していた(Martenot 1978, 190)。

このように、簡単な課題を合理的に学習し、遊びと教育を連動させる音楽教育法の中で、マルトノはリラクゼーションを行う重要性を指摘している(Martenot 1955, 246; 1978, 172)。

いわく、リラクゼーションはすべての芸術教育に必須の項目であり、リラクゼーションを通して肉体の在り方を変えることで、芸術表現の質が向上すると述べるのである (Martenot 1978, 171-175)。そして、最終的に、メソッドを通して「生命を解放し、輝かせ、尊重する “libérer, épanouir, respecter la vie”」⁴ことを大目標として掲げている。

このリラクゼーションとは、どのようなものなのか。それは現代で言う脱力と癒しの効果を求めるリラクゼーションとはかなり様相を異にしている。その歴史的成り立ちと目的を再検証する上で、マルトノが自身のリラクゼーション法を提唱する以前、ロシア出身のチェリスト、ビルシュティン Youri Bilstin (1888-1947) と共に考案した 1920 年代のリラクゼーション・メソッドの内容も参照し、マルトノのリラクゼーション思想の再構成を試みたい。

ビルシュティンのリラクゼーション

まず、マルトノと共にリラクゼーション・メソッドを考案したビルシュティンとはどのような人物であったのか。我が国の作曲家、小松耕輔 (1884-1966) が所蔵していた資料によれば、ビルシュティンはグルジアの首都チフリス Tiflis (現トビリシ Tbilisi) で幼年期を過ごし、ブリュッセル音楽院等でチェロを学んだ後、マルトノと共に、パリとニューヨークにおける「心理・生理学的音楽教育研究所」の開設に関わったと記されている (“Prof. Maurice Martenot”, n. p.)。1928 年、チェリストとしてパリのサル・ガヴォーでコンサートを行った際の記録も残っており、奏者としてそれなりの活躍をしていたのではないかと推測される (“Concert Bilstin”, 1928)。

同じく幼年期からチェロを演奏していたマルトノとの出会いは、1924 年、フェリエール Adolphe Ferrières らが参加したヴィユボンでの「新教育国際会議 Congrès internationale d'éducation nouvelle」において、ビルシュティンの演奏に感銘を受けたマルトノが声をかけたことが契機とされている (Laurendeau 1990, 56)。

ビルシュティンが考案したリラクゼーション法とは、どのようなものだったのか。ビルシュティンは、自らの音楽教育法を記した『心理・生理学的音楽教育法 *Méthode psychophysilogique d'enseignement musical*』を、全 3 巻にわたって出版し、『ヴィルトゥオーゾの手の訓練——ピアニスト、ヴァイオリニスト、チェリストなどのための *Gymnastique manuelle du virtuose à l'usage des pianistes, violonistes, violocellistes, etc.*』の他、歌唱法を扱う巻も刊行予定として記載していた⁵。このように、楽器を限定せず、演奏技術全般を扱う音楽教育法を提示しようとしていたことが窺われる。

この『心理・生理学的音楽教育法』シリーズの第一巻が『リラクゼーション *Relaxation*』(Bilstin 1927) である。副題は「すべての芸術表現に向けた身体の準備運動 *Gymnastique de préparation de l'organisme en vue de toute réalisation artistique*」とされ、「芸術的成果と

同時に人間のあらゆる能力を発展させること」(Bilstin 1927, 11)が目的として執筆された⁶。つまり、リラクゼーションは、人間の能力を多角的に高め、芸術表現の質を向上するための基礎的身体技法として提示されているのである。

このリラクゼーションは、現代にみられる脱力や癒しの効果を求めたリラクゼーションとは異なり、一連の舞踏のような動きで構成されている(図3)。身体の各部分を分節することで効率良く用いる方法が模索され、最終的に、これらの動きは分類・体系化され、詳細な実践メニューが提示される(Bilstin 1927, 49-63)。また、メソッド後半では人間の精神活動が図式化され、それを統合する「中心」に実践者自身を位置づけることで、精神を解放することが目指されている(図4)。こうした図や分節化の多用には、合理的な意識では捉え難い精神や五感といったものを、過剰な程の合理性で把握しようとする態度が表れている。他方、身体運動を通して精神の深みに到達しようとする点は、グルジエフ George Ivanovich Gurdjieff (1866-1949)の神聖舞踏や、デルサルト François Delsarte (1811-1871)の身体表現との共通性をも想起させる⁷。つまり、ビルシュティンのリラクゼーションにおいては、肉体を合理的訓練が可能な機械のようなものとみなすデカルト的な合理主義と、合理的意識では捉えられないものごとへの興味がないまぜになっていた。実際、陽光あふれる自然のなかでギリシャ風のチュニクをまとい、円陣を組むビルシュティンらのリラクゼーションは(図5)、ヨーロッパの運動概念に多大な影響を与えながら形式主義の批判を浴びたリング Pher Henrik Ling (1776-1839)のスウェーデン体操等とは対照的に(入江 2017, 19)、身体を通じて自由な表現を模索する試みであり、20世紀の初頭にかけてヨーロッパで発現した古代ギリシャ復古主義や神秘主義的思想の一端に位置づけることができるだろう⁸。

Web上では非公開とさせていただきます

図3 Bilstin 1927, 67-68.

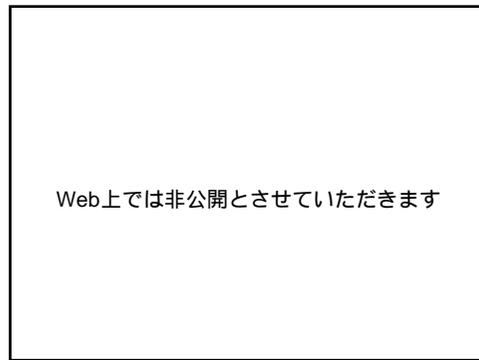


図4 Bilstin, 89.



図5 Laurendeau, chap. 5.

マルトノは家族ぐるみでビルシュティンと交流し、幼年期にマルトノの教育係でもあった長姉マドレーヌ Madeleine Martenot (1887-1982) (図6) も、妹のジネット Ginette Martenot (1902-1996) と共に、ビルシュティンのリラクゼーションに傾倒した (図7)。ビルシュティンは、前掲の『リラクゼーション』をジネットに献呈し (Bilstin 1927, page de dédicace)、マルトノ自身、後年出版したリラクゼーションの著書『リラクゼーション・アクティヴ *Relaxation active*』の中で、ビルシュティンのメソッドから受けた根源的な恩恵について述べるなど (Martenot 1998, 18)、相互に影響を与えていた様子が窺われる。では、マルトノのリラクゼーション・メソッドは、ビルシュティンのそれと比較した場合、どのような特徴を持っていたと考えられるだろうか。



左図6 モリス・マルトノと妹ジネットに音楽を教えるマドレーヌ Laurendeau, chap. 5.

右図7 Groupe Bilstin (資料提供ジャン＝ルイ・マルトノ氏)。

マルトノのリラクゼーション

マルトノは自身のリラクゼーション・メソッドを「運動学 la kinésophie」(Martenot 1998, 15) と称し、ビルシュティン同様、身体の分節化と自己のコントロールによって、精神の自由を得ることを目指している (*ibid.*, 24-30)。

しかし、ビルシュティンのリラクゼーション思想が、あくまでより高度な演奏技術や芸術的表現を追求する基礎的手段として位置づけられていたのに対し、マルトノのそれは、人生全般を対象に「よりよく生きるための技 un meilleur art de vivre」へと目的を拡大している (*ibid.*, 15)。

例えば、マルトノが紹介するリラクゼーションの第6カテゴリーに置かれた「重さに身をゆだねるエクササイズ Exercices d'abandon à la pesanteur」は、身体の一部を分節化しながら力を抜く試みであり、「ビルシュティンのメソッド」と但し書きがついている (*ibid.*, 122-136) (図8)。そして、このカテゴリーの中で手からの脱力を目指すエクササイズは、演奏家にとりわけ効果があると記載されている (*ibid.*, 136)。

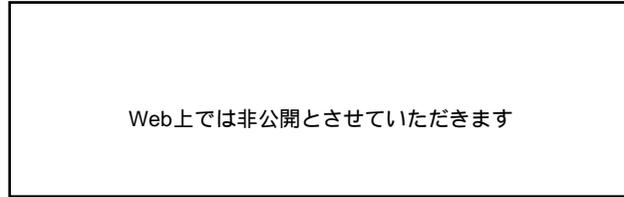


図8 Martenot, Saïto, p. 128

一方、終盤の第19カテゴリーに位置する以下のエクササイズでは、身体と内面の状態の調和を生み出すことが目的とされている（図9）。

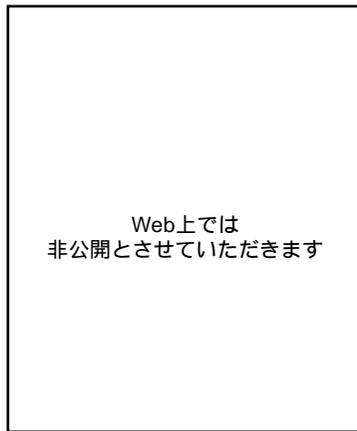


図9 Martenot, Saïto, p. 186

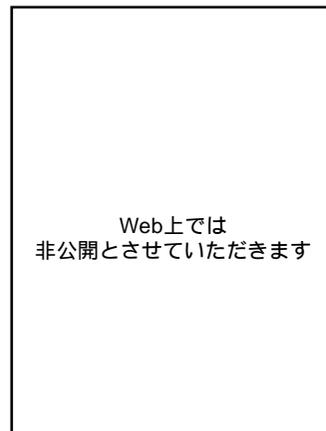


図10 Martenot, Saïto, p. 189

上記のエクササイズでは、無駄な筋肉の緊張を解放し、精神のこわばりを取ることで、「豊かな静寂と調和 une tranquillité et une harmonie enrichissantes」や「自由な状態 disponibilité」がもたらされると記述されている（*ibid.*, 185-186）。

また、同じカテゴリーに属する「螺旋」のエクササイズでは、両手で空中に渦巻きを描くエクササイズを通して、内面の「豊かさ plénitude」や「歓喜 épanouissement」の感覚がもたらされると述べている（*ibid.*, 188）（図10）。そして、最終カテゴリーの「身体を用いた即興 improvisation gestuelle」を通して、自身の「ありのまま laisser faire」の表現を表出することの重要性が説かれている（*ibid.*, 195）。

マルトノは、文明の進展に伴いますます多くの仕事や圧迫を抱える現代人の苦しみを解決すべき課題として挙げながら（Martenot 1931, 3899）、自らのリラクゼーションを、「現在の生活様式によって人間に課されるあらゆる種類の苦痛を解消する貴重な解毒剤」と称している（Martenot 1998, 18）⁹。この点からも、マルトノの主要な問題意識が、芸術表現の

基礎的技法から近現代人の生き方の問題へと変化していることが窺われる。

マルトノはなぜ、解放された生き方の実現を目指すリラクゼーションを音楽教育において重視したのだろうか。これはマルトノ自身の幼少期の経験と関係がある可能性がある。以下、マルトノの伝記に依りながら、その音楽思想のルーツについてひとつの可能性を探ってみたい。

ありのままの音楽表現を目指して

マルトノが幼少時に受けた音楽教育にまつわるエピソードは、カナダ人オンディスト（オンド演奏者）、ロランドォが、マルトノ自身へのインタビューや、関連一次資料を豊富に利用しながら著した、マルトノの伝記（Laurendeau 1990）に詳しく見出される。以下に概要を述べる。

二人の姉妹に囲まれた育ったマルトノは元来「超過敏な性質」（*ibid.*, 30）を持っており、第二子の逝去以来気のふさがちであった母親に代わる教育係及び世話係であり、10歳以上年の離れた前掲の長姉、マドレーヌに育てられていた。マドレーヌはパナマ運河事業の失敗の影響で財産を失った父に代わり、一家の主たる養い手として音楽教師への道を進んでおり、年の離れた弟妹の音楽教育を熱心に行ったことも記されている（*ibid.*, 33）。具体的に、ピアノは勿論、音感教育を通じた絶対音感の獲得と、音と色彩の関連づけなども行っていたとされ、マルトノ家の親戚であり、パリ国立高等音楽院ハープ課の教授であったラファエル・マルトノ Raphaël Martenot (1875-1916) の協力のもと、音楽界への有力な人脈を作りながら、自身の音楽教室を順調に拡大した（*ibid.*, 41）。ラザール・レヴィの息子の音楽教育も任されるほどであったこの姉から、音楽のいわばエリート教育を受けて育ったマルトノは、小さなうちからチェロの神童として舞台に立ち、忙しい日々を送っていた。一方、繊細な性質のためか、学校に通うのを好まず、音楽活動の多忙さ等を理由に途中で通わなくなった（*ibid.*, 37）。以降、自宅で自分の好きなように時間割を組み、姉や週一回の家庭教師からの指導を挟みながら、さまざまな教科を学んでいたという。

これらの逸話は、マルトノの人生の一側面に光を当てている。伝記を信頼して良いならば、マルトノの成育環境にはたしかに特殊な面があり、特に音楽の点では、非常に優れた教育を受けていたと言えるだろう。推察が許されるならば、マルトノの音楽教育思想の根底にある、画一性への違和感や自由の重視は、マルトノ自身の子供時代の経験と無関係ではなかっただろう。そして、もしそうだったとするならば、ありのままの表現の表出を目指した、後年のマルトノのリラクゼーションは、音楽におけるその人本来の自由な表現という、いわく客観的には捉え難い演奏者の資質を、理論・実践的に引き出す手法の一つとして提唱されていたのではないだろうか。

1969年、モンリオール（カナダ）のエコール・ノルマル音楽院で開かれた「人間性の発達に芸術が果たす役割」と題された講演で、マルトノは身体感覚や遊びに着目した自らの音楽教育が、人間性そのものの発達にも資することを主張している（Martenot 2009, n. p）。この主張は、音楽の教育が従来の職人的な演奏（或いは作曲）技術の錬磨という範囲を超え、広く人間性の形成にも役立つべきであるという訴えであり、主知主義を否定し、児童の主体的な活動に価値を置く19世紀末から20世紀初旬の新教育運動（鈴木 2014, 59-60）、あるいは近年米国等を中心に推進されるリベラル・アーツとしての音楽教育思想（菅野 2015 [ウェブサイト]）にも通ずる特色を示している。

もっとも、マルトノの教育法を含め、オルフやコダーイ Kodály Zoltán (1882-1967) らが提唱した、いわゆる「積極的教育法」全般に対しては、十分な技法の熟達をもたらさず、表面的な改革にとどまっているとして、後年批判が寄せられることになった（テシュネ 2006, 128）。しかし、マルトノがフランスの国家教育上級評議会 Conseil supérieur de l'éducation nationale の一員となったこと（Laurendeau, 126）、あるいは、文化省 Affaires culturelles から年ごとのスタージュ開催の依頼を受けたことなどを踏まえると（*ibid.*, 168）、人間的教育を重視するその音楽教育思想が、フランスでまったくインパクトが無かったわけではないこともまた確かなようだ。

また、前述したように、マルトノは集団教育においても有効な合理的音楽教育法を考案し、折に触れて集団へのレッスンをを行うポイントを解説している（Martenot 1978, 164; 1955, 250）。そして、集団教育においても創造性を育むことが可能であると主張し（Martenot 1955, 250）、自身の教育法と「芸術教育の幸福な民主化 l'heureuse démocratisation de l'enseignement artistique」を結びつけている（Martenot 1978, 7）。こうした点からは、マルトノが知性主義や専門性重視の立場よりも、簡略化された内容と合理化された手法に基づき、あらゆる人々に平等に芸術を教授すべきだという考えを持っていたことが推察される。

教育方法論に見られる平等主義的観点は、マルトノの楽器制作にも反映されていると言えそうだ。電子楽器についての概説の中で、マルトノは、「科学技術を用いた [練習という] 苦役の軽減」により、演奏技法を探求する余裕のなかった「生まれながらの音楽家 personnes musiciennes de nature」に、演奏の楽しみが開かれることへの期待を示している（Martenot 1931, 3899）。さらには、科学技術の恩恵により「多数のアマチュアが自分の能力に応じてクラシックもしくは現代音楽を演奏する」理想的未来についても言及している（プリーベルク 1961, 176-177）。

以上見てきたように、マルトノは、楽器開発、音楽教育、リラクゼーション・メソッドの考案等、多岐にわたる活動の中で、人がその固有の表現を行う音楽実践の喜びを、あらゆる人々に提供するという理想を求めていたと言える。本稿では、こうしたマルトノの思想が、幼少期の性向や教育環境と関わっている可能性も見た。それらの活動は、まさに、音楽にお

ける「ヒューマニズム humanisme」(Gartenlaub, 311)の表れと称するのが相応しいように思われる。

本稿では、マルトノの「ヒューマニズム」が、どのような観点から導かれているのかについて、まだ課題を残している。それを解明するためには、今後、マルトノがどのような思想を抱いていたのか、マルトノ関連の一次資料や同時代の教育論などをより広く参照しながら、いっそう調査する必要があるだろう。とはいえ、ここまで見てきた中で、今日の音楽教育のあり方を再考する上でマルトノの音楽教育論が一定程度傾聴に値するものをもっていったことが明らかになったと思われる。参考までに、マルトノは、ロランドォとのインタビューの中で、「1952年の著作において、「ソルフェージュ」という言葉をフォルマシオン・ミュージカルに置き換えた」と述べている(Laurendeau, 185)。一方、本稿冒頭で見たように、マルトノからの思想的影響を述懐したガルテンロブは、「フォルマシオン・ミュージカル formation musicale」によるソルフェージュの改革を主導し、今日、我が国の音楽教育においても、その「フォルマシオン」を通じた知識と実践のより良い統合が模索されている(照屋 2001 他)。そして、この「育成 formation」の試みは、マルトノの述べたありのままの表現や、ヒューマニズムの観点と何等かの連続性を持つ可能性が高い。それを再確認することで、マルトノの思想が現代の我々の音楽教育にも一定の反響を及ぼしていることが示唆されるだろう。

注

- 1 例えば、ロランドォ Jean Laurendeau (1938-)によるマルトノの伝記では、第一二章におけるインタビューの中で、「自然なテンポ」や「記憶」など、マルトノの教育法においてしばしば取り上げられる概念が部分的に説明されている(Laurendeau 1990, 181-220)。
- 2 本稿は、大矢 2012で触れたマルトノの音楽教育に関する議論を発展させたものである。
- 3 “Progression acquis par acquis.”
- 4 この標語はマルトノ・メソッドのテキストの裏表紙等にかかれている。
- 5 第三巻『チェロの上級練習 *Etudes supérieure du violoncelle*』は Eschig 社から現在も入手可能である(Bilstin 2018)。また、第四から第七巻はじっさい出版されていないものの、第一巻表紙に刊行予定が記されている(Bilstin 1927, 1^{ère} de couverture)。
- 6 “Voilà donc le but de notre ouvrage: obtenir en même temps qu'un résultat artistique, un développement général de toutes les facultés de l'être.”
- 7 グルジエフの活動については、P. D. ウスペンスキー 1981を、デルサルトの身体表現については、入江 2017を参照。
- 8 20世紀初頭のウィーンにみられた神智学、菜食運動、裸体運動に関しては、上山 1989を参照。
- 9 “[U]n précieux antidote contre les agressions de toute nature infligées aux humains par le

mode de vie actuel.”

引用文献表

邦語文献

- 入江眞理 2017 「J = ダルクローズが体操教育から受けた影響とその後の体操教育の発展に及ぼした影響についての研究」、明星大学大学院博士論文。
- 上山安敏 1989 『フロイトとユング——精神分析運動とヨーロッパ知識社会』 東京：岩波書店。
- ウスペンスキー、P. D. 1981 『奇跡を求めて——グルジェフの神秘宇宙論』 (Pyotr Demianovich Ouspensky. *In Search of the Miraculous: Fragments of an Unknown Teaching*. London: Routledge, 1949) 浅井雅志訳、東京：平河出版社。
- 大矢素子 2012 「オンド・マルトノの開発史とその作品——コンテクストから読み解く電子楽器」、東京藝術大学博士論文。
- テシュネ、ローラン 2006 「ソルフエージュ：明日のための教育法 (2) ——20世紀フランスのソルフエージュ第1部」 関根敏子 (訳) 『東京藝術大学音楽学部紀要』 31 : 113-139.
- 照屋正樹 2001 「フォルマシオン・ミュージカルの日本に於ける実践事例と問題点」『洗足論叢』 30 : 29-40.
- 鈴木和正 2017 「教育に関する歴史及び思想：20世紀の教育と新教育運動」『常葉大学教育学部紀要』 38 : 59-67.
- プリーベルク、フレッド 1961 『電気技術時代の音楽』 (Fred. K. Prieberg. *Musik des technischen Zeitalters*. Zurich: Atlantis, 1956) 入野義朗訳、東京：音楽之友社。

欧語文献

- Bilstin, Youri. 1927. *Méthode psycho-physiologique d'enseignement musical, t. 1: Relaxation gymnastique de préparation en vue de toute réalisation artistique*. Paris: Max Eschig.
- Concert Youri Bilstin au 25 avril 1928 (資料提供ジャン＝ルイ・マルトノ氏).
- Gartenlaub, Odette. 1999. "Le solfège dans la formation musicale" In *Le Conservatoire de Paris: Deux cents ans de pédagogie 1795-1995*, edited by Anne Bongrain and Alain Poirier, 309-316. Paris: Bouchet/Chastel.
- Laurendeau, Jean. 1990. *Maurice Martenot: luthier de l'électronique*. Croissy-Beaubourg: Dervy-Livres.
- Martenot, Maurice. 1931. "L'Electricité au service de la musique." In *Encyclopédie de la musique et dictionnaire du Conservatoire*, vol. 2, edited by Albert Lavignac, 3896-3899. Paris: Delagrave.
- . 1955. "Le méthode Martenot." In *La musique dans l'éducation: Conférence internationale sur le*

- rôle et la place de la musique dans l'éducation de la jeunesse et des adultes, 242-251. Paris: Unesco-Armand Colin.
- . 1978. *Principes fondamentaux d'éducation musicale et leur application* (5ème édition). Paris: Magnard.
- . 1989 (8ème édition). *Méthode Martenot Cahiers IA*. Paris: Magnard.
- . 2009. "Le role des arts dans le développement de la personnalité." Conférence à l' Ecole normale de Musique de Montréal, le 15 juillet 1969, r. p. in *Bulletin de l'a association des enseignements Martenot*, no. 40, 2009, n. p.
- Martenot, Maurice, and Christine Saito. 1998. *La relaxation active: le corps, expression de l'être*. Paris: Le courrier du livre.
- Prof. Maurice Martenot (上野学園大学「小松耕輔文庫」所蔵パンフレット).
- 'Théâtre national de l'opéra / Les ondes musicales Maurice Martenot', 5 mai 1928 (オンド・マルトノ オペラ座公開時のパンフレット), 資料提供原田節氏.

ウェブサイト

- 菅野恵理子 2015 「今こそ音楽を！」(全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)ウェブサイト内)
http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2015/05/01_19605.html (2020年9月10日閲覧)
- "Ondes Martenot 1er, 2e et 3e cycles supérieurs." In *Conservatoire National Supérieur de Musique et de Danse de Paris*, <http://www.conservatoiredeparis.fr/disciplines/les-disciplines/les-disciplines-detail/discipline/ondes-martenot-1er-2e-et-3e-cycles-superieurs/> (2020年4月1日閲覧)

The “Méthode Martenot” and Relaxation

OYA Motoko

Maurice Martenot is known today as the inventor of the electronic instrument “Ondes Martenot” in 1928. But he was also active as educator of the “Méthode Martenot”, a method of teaching in music and in art in general. In this article, we will see how this method of educating music was related with the relaxation method which Martenot invented, firstly collaborating with the Russian cellist Bilstin early in 1920’s. In the first half of the article, we will compare these two methods and try to elucidate similarities in their nature and aims. In the latter half of this article, we will consider how Martenot’s concept of ‘relaxation’ was the central concern of the “Méthode Martenot”, as can be seen in Martenot’s motto concerning his method: “libérer, épanouir, respecter la vie”. Finally, we will conclude by examining Martenot’s willingness to give every individual equal opportunities to look for their own artistic expression. Stress on individuality and freedom seems to have been the common motivation behind Martenot’s various activities as inventor, educator, and evangelist of relaxation.